

浦幌町の文化財保護周知標識

番号	年 度	名 称	指 定
1	昭和 55	十勝太Dチャシ跡 下頃辺遺跡包蔵地	
2	56	岐阜農場事務所跡	
3	57	中浦幌駅遁所跡	
4	58	オタフンベチャシ跡	国
5	59	上浦幌駅遁所跡	
6	60	上川上駅遁所跡	
7	61	生剛村市街地と戸長役場	
8	62	斎藤牧場事務所跡	
9	63	黒岩農業事務所跡	
10	平成元	十勝太Dチャシ跡	
11	2	下頃辺遺跡	
12	3	チュクベツ渡船場跡	
13	4	共栄B遺跡	
14	5	オタフンベチャシ跡	国

Table.1 設置年度一覧表

十勝太Dチャシ跡

このチャシ跡は、1934（昭和9）年大津村立静内尋常小学校の斎藤米太郎によって発見された。チャシは十勝川左岸の急な崖上の端に構築されており、いわゆる面崖式と呼ばれるタイプで、チャシの直下はアイヌ語でモイと呼ばれる瀬になっており、モイ地形にあるチャシとしても重要である。

このチャシは十勝太地区に所在する6基のチャシ中、最西端に位置しており、かつてこの地はオペツコハシ（尻を・川・の岸に・くつづけている者）と呼ばれ、浦幌町の旧名「生剛村」の原名となった地点でもある。チャシは弧状の壕を構え、古くは竪穴もあったらしいが、現在見ることはできないが、チャシ型

式・立地などを示す一パターンとして重要な遺跡と認められる。

下頃辺遺跡

この遺跡は昭和34年8月、東京大学アイヌ学術調査団（団長・泉靖一助教授）が発見、翌月北海道学芸大学河野廣道教授等を加えて発掘調査が実施されました。その結果、繩文時代早期の住居跡が発見され、そこから平底で小波状の口縁を持ち、胴部にヘラ描き沈線文が施された土器が検出されました。この土器はその特徴から当時、北海道最古の土器と認定され、これまで発見されたことのない土器であったので、遺跡の名を取って「下頃辺式土器」と名付けられ、およそ8千年前の

ものと推定されました。

この土器の発見によって北海道東部の縄文時代早期に「縄」で文様を施文する土器よりも前に条痕文・貝殻文・無文の平底土器が存在することが知られるようになり、その後の先史時代研究発展の大きな契機となりました。

また、この下頃辺遺跡周辺の吉野大地は遺跡の多い地域として学界でも広く知られ、特に縄文早期の住居跡をはじめ墳墓などが埋蔵されている極めて重要な地帯であることが確認されている。

岐阜農場事務所跡

往時、ニレの巨木が大きく枝を広げていたこの地は、岐阜農場事務所が設置されたところである。岐阜農場は、明治29年岐阜県選出衆議院議員、大野亀三郎らが設立した第2岐阜殖民合資会社によって開設された。

大野らは、同年下浦幌原野に約299万坪(約988ha)の予定存地の指定を受け、8月農場管理人下野松太郎らを派遣して土地選定を決定した。

大野らは、移着とともにプラオ3台、ハロー2台を購入し、人夫を雇って35町歩(35ha)を墾成し、草小屋30棟を造作し、翌年小作人59戸、31年16戸を受入れた。

小作人は岐阜県54戸、富山県8戸、石川県6戸、その他からなり、契約は1戸1万5千坪(約5ha)を配当し、5ヵ年で墾成し、1年間の食糧と農具、種子、家具などの現品を貸付け、小屋掛料7円を支給して3~5年で返納させ、開墾料を1反(約10a)につき樹林地2円、草原地50銭を支給するというものであった。

農場直轄の事業として排水溝数百間を掘削し、試作地を設け、馬匹の改良にも着手し、明治36年種牡馬(フランス・ライテイン号)の貸付けも受けた。しかし、農場地は十勝川・浦幌川・下頃辺川に囲まれた地域で地味肥沃ではあったが、泥炭性湿地で度々洪水もあり、経営上障害もあったため、大正14年蘇原銀行の手に渡り、さらに昭和7年には清水の広川宅一郎、翌8年には大島角治らに渡り、昭和10年耕作者に解放された。

岐阜農場は、熊谷農場・土田農場とともに浦幌町開拓時代初期の3大農場と称され、本町の発展に大きく貢献したと評価されている。

中浦幌駅逕所跡

この地は往時、中浦幌駅逕所の設置されていたところである。中浦幌駅逕所は、明治36年北海道庁告示第375号により設置、同41年に駅舎が完成して業務が始められた。取扱人は中川北松である。本駅逕所は、下浦幌駅逕所から4里(約15.7km)、上浦幌駅逕所まで2里28町(約10.9km)の箇所に設置され、大正年間には富山の薬売商人、流送人夫、役人等多数が宿泊し、奥地開拓の最前線基地として、また浦幌~本別間の交通の要衝として重要な役割を果たしてきた。さらに、郵便業務(通送)や売店の役目も担い、開拓地の中心施設でもあった。

駅逕所は、寛政11年江戸幕府が東蝦夷地直轄の際、南部から馬を移入して各場所に配置し、場所請負人に請負わせ、「通行屋」と称して運搬、駅馬の用をさせたのを始めとするが、明治維新後、場所請負制度は廃止されたが、交通手段として開拓使は「駅逕規制」を制定、

重要な道筋に駅逓所を設置して内陸の開発に便宜を与えた。その後、3県時代を経て、道庁治下となり、明治28年「官設駅逓取扱規則」の制定で制度の完成をみた。この制度は半官半民の請負制度で、旅行者に対する宿泊、人馬の継立を行なったが、全道で明治末期には238駅、備馬2,835頭を記録した。

その後、開拓路線の進展に伴ない漸次増設されたが、拓殖計画の完成により、昭和21年規則の廃止に伴ない全廃された。

なお、中浦幌駅逓所も昭和3年、役目を終え25年にわたる歴史に幕をおろした。

オタフンベチャシ跡

1. 指定年月日 昭和56年8月29日
2. 指定の理由 特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準史跡2（その他政治に関する遺跡）による。
3. 説明事項 史跡オタフンベチャシ跡は、白糠丘陵が太平洋に半島状に突き出た半独立丘陵の先端に構築された、いわゆるお供山型のチャシ跡である。

標高27メートルの上部平坦面は、東西約21メートル、南北約7メートルの長方形を呈し、標高22メートル付近に深さ約1メートル、幅5メートルの空壕をめぐらしている。

お供山型チャシ跡の典型的なものであり、チャシの代表として貴重である。

上浦幌駅逓所跡

この地は往時、上浦幌駅逓所の設置されていたところである。

上浦幌駅逓所は、明治41年北海道庁告示第

44号により設置されたが、駅逓所の業務は明治39年9月14日に既に開始されていた。

初代取扱人は守屋晋であったが、明治41年からは朝日浅吉が担任した。

本駅逓所は、中浦幌駅逓所（留真）から2里28町2間（約10.9km）、本別駅逓所まで3里32町（約15km）の箇所に設置され、大正年間には富山の薬売商人、流送人夫、役人など多数が宿泊し、奥地開拓の最前線基地として、また浦幌～本別間の交通の要衝として重要な役割を果たしてきた。

駅逓所は、寛政11年、江戸幕府が東蝦夷地直轄の際、南部から馬を移入して各場所に配置し、場所請負人に請負わせ「通行屋」と称して運搬、駅馬の用をさせたのを初めとするが、明治維新後、場所請負制度は廃止されたが、交通手段として開拓使は「駅逓規則」を制定、重要な道筋に駅逓所を設置して内陸の開発に便宜を与えた。

その後、3県時代を経て、道庁治下となり、明治28年「官設駅逓取扱規則」の制定で制度の完成をみた。

この制度は半官半民の請負制度で、旅行者に対する宿泊、人馬の継立を行なったが、全道で明治末期には238駅、備馬2,835頭を記録した。その後、開拓路線の進展に伴い漸次増設されたが、拓殖計画の完成により、昭和21年規則の廃止に伴い全廃された。

なお、上浦幌駅逓所も昭和6年役目を終え、25年にわたる歴史に幕を降した。

上川上駅逓所跡

この地は往時、上川上駅逓所の設置されていたところである。上川上駅逓所は、昭和4

年11月14日北海道庁告示第1360号により、浦幌村大字浦幌村字上浦幌東22線北75番地の甲に、同年11月5日に設置された。取扱人は北村小三郎で、同年10月7日に発令を受けた。

本駅逕所は上浦幌駅逕所（活平）から5里25町、本別停車場から3里の位置に設置され、昭和初期には富山の薬売り商人や舢舨、役人等多数が宿泊し、奥地開拓の最前線基地となった。

駅逕所は、寛政11年、江戸幕府が東蝦夷地直轄の際、南部から馬を移入して各場所に配置し、場所請負人に請負わせ、「通行屋」と称して運搬、駅馬の用をさせたのを初めとするが、明治維新後、場所請負制度は廃止されたが、交通手段として開拓使は「駅逕規則」を制定、重要な道筋に駅逕所を設置して内陸の開発に便宜を与えた。

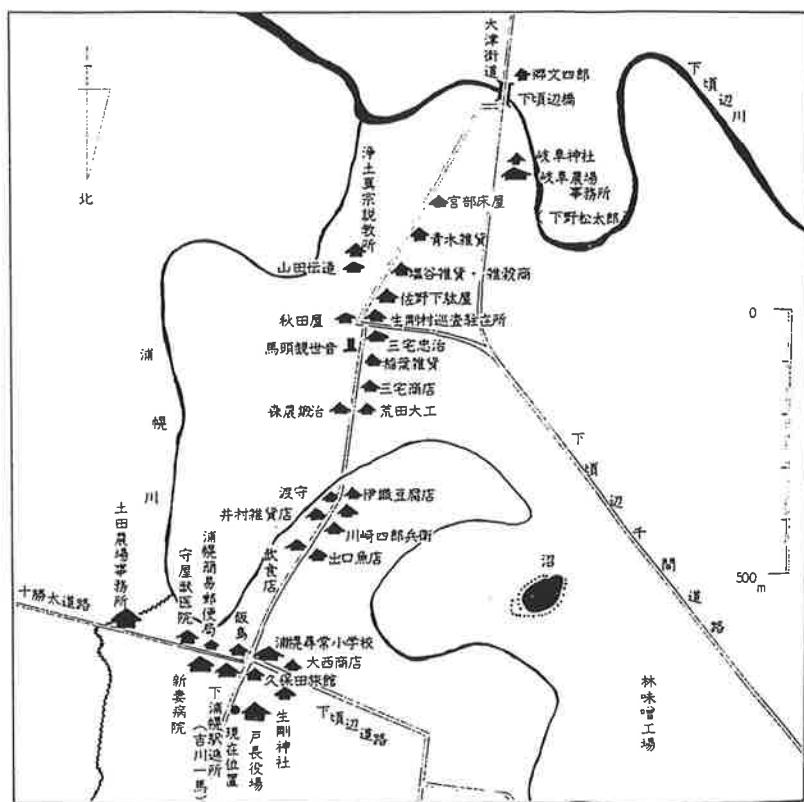
その後、3県時代を経て、道庁治下となり、

明治28年「官設駅逕取扱規則」の制定で制度の完成をみた。この制度は半官半民の請負制度で、旅行者に対する宿泊、人馬の継立を行ったが、全道で明治末期には238駅、備馬2,835頭を記録した。その後、開拓路線の進展に伴い漸次増設されたが、拓殖計画の完成により、昭和21年規則の廃止に伴い全廃された。

なお、上川上駅逕所も昭和19年8月31日役目を終え、25年にわたる歴史に幕を降した。

生剛村市街地と戸長役場

明治33年4月1日、大津村から分離独立した生剛村ほか2村（十勝村・愛牛村）は、当地に戸長役場を設置し、初代戸長、小沢熊太のもとで行政事務を開始した。同時に、生剛村巡回駐在所も設置され、同年7月1日には浦幌尋常小学校（現・吉野小学校）も創立、



明治36年には下浦幌駅通所も開業した。

また、これより先、明治32年には浦幌簡易郵便局も設置されており、明治35～36年ころには戸長役場、駅通所、郵便局、農場事務所、学校などを中心にひとかどの街並みも形成されていた。

しかし、明治36年12月、釧路線浦幌駅が開業すると、戸長役場をはじめとしてほとんどの建物は、現浦幌市街地などに移転し、わずか数年でこの市街地は消滅した。

その後、明治39年に二級村の指定を受けて行政区画を一部変更し、十勝村は大津村に、愛牛村は生剛村に帰属することとなり、明治45年には村名を生剛村から浦幌村に改称するに至った。

斎藤牧場事務所跡

1. 創建及び沿革

本建物は、明治36年(推定)、初代斎藤兵太郎により建築されたものである。兵太郎は、安政3年9月25日、渡島国松前郡福山下町に生まれ、幼少より松前藩主の小姓・佑筆係として出仕していたが、明治4年の廃藩置県により失職、函館の田畠商店に勤務、その後広業商会函館支店に移り、同13年には同商会広尾出張所主任となった。

同出張所は同16年に廃止となったがそのまま広尾にとどまり鮭漁業、昆布採取業、太物商を営んでいたが、同19年大津へ転任、鮭漁業のほか大津郵便局長を勤め、帯広では酒店も経営した。

同20年、石黒林太郎らと協議して十勝産馬改良組合を設立したが、同23年解散。

同21年には十勝・中川両郡の漁業者18名で

十勝漁業組合を起こし、初代頭取となり、翌22年、打内に鮭建網を經營し、400石余という驚異的な収穫量を上げた。

同24年、北海道庁は産馬改良の必要性から種雄馬を輸入して民間に貸付けることとしたが、第2手稻号を晩成社に、第2ダプリン号を兵太郎に貸付けた。

これが十勝における産馬改良の初めである。

同36年、本格的な牧場經營を目指して厚内へ移転。

この際建造したのが本建物である。

同39年、発起人26人、参加者363人をもって十勝産牛馬組合を設立、副組長に就任、更に大正10年大津漁業組合の設立に同意、同12年十勝無尽株式会社(現北洋相互銀行帯広支店)の設立に参画し、取締役となった。

昭和2年、帯広で死去。

2. 建築史学上の価値

日本で牧場事務所建築として現存しているのは札幌のダン記念館と本建物のみであり、外観は洋風、内部は和風を主体としているが、北海道の洋風建築のみがもつ特色（上げ下げ窓、6枚入りガラス建具）を兼ね備え、棟飾りはルネッサンス様式のものが取付けられ、北海道では唯一のものとなっている。

また、事務所・応接用空間と日常生活空間が完全に分離し、居住空間の間取りは中廊下型であるが、大正期のものとは異なっている。

黒岩農場事務所跡

黒岩農場は黒岩四方之進が、明治36年直別原野に開設した農場である。

黒岩四方之進は、安政3年5月22日高知県安芸郡川北村松田島で士族黒岩一郎・信子の

長男として生まれ、明治9年札幌農学校に第1期生として入学、有名なウイリアム・クラーク博士の門下生となり、「神は愛なり」をモットーとしたクリスチャンとなった。

卒業後、日高新冠御料牧場長（主馬守）となり、直別地区に2千町歩の土地払い下げを受け、明治32年ころ先発隊として中島久太郎・渡辺友次郎を送って開拓の準備を行い、明治36年退職とともに当地へ入植した。

当農場事務所は四方之進の居宅と兼ねた木造3階建であった。

黒岩農場は、キリスト教精神に基づいて経営され、明治41年アメリカから280円で抜根器を購入して開墾を促進するとともに、十勝で初めて椎茸の栽培を行うなど意欲的な経営を試み、小作人の生活物資を事務所に置き、週一回米・味噌・醤油などを配合したほか、子弟教育にも力を注ぎ、校地1万5千坪を寄付し、明治38年に厚内教育所付属直別教授所（後の直別小学校）を開設させた。

しかし、実子がいなかったため昭和4年、四方之進が死去すると農場は釧路直別で大きく木工場・薪炭業を経営していた池端伊太郎に売却され、その一部は北海道庁に転売されたが、その後、今野務らの運動により各々2戸分の土地の確保ができ、昭和7年に小作人に解放された。

なお、作家として著名な黒岩涙香は四方之進の実弟である。

チュクベツ渡船場跡

直別川はアイヌ語で〔秋・川〕の意味と言われ、江戸時代には東蝦夷地のトカチ場所とクスリ場所の境であったことから、早くから

古文書にその地名が記録されている。

特に、幕末には多くの幕吏や旅行者がこの地を通過したことから、東蝦夷地の交通の要衝となつたが、直別川は水量が多く、川幅も広く渡河が困難であったため、ここから南東1.4キロの河口部にチュクベツ渡船場が設けられ旅行者の便を図っていた。

この渡船場の設置年代は不明であるが、幕末の様子を松浦武四郎は『初航蝦夷日誌』で「チュクベツ、川有。巾十間。丸木船渡し。夷人小屋有る也」、『竹四郎回浦日記』では「チュクベツ…此所クスリ・トカチ両持ちにして、隔年に渡し守を出す。一ヶ月給代六百文のよし。川向に夷家二軒有。両川岸に標柱を建てたり」と伝えており、明治6年の渡船料は人7銭、馬1銭、明治15年には人7銭、馬10銭となり、渡し守の1年の給与は14円52銭であった。

また、明治25年ごろには対岸の釧路直別の高島文吉が私設駅逕所を開業し、旅行者の利便を図っていた。

共栄B遺跡

この遺跡は昭和44年浦幌高校郷土研究部々員によって発見され、同50年町教育委員会が発掘調査を行った縄文時代早期（約7千年前）の石刃鎌文化の遺跡です。

発掘調査では、住居跡2基、土壙19基、焼土2基とともに、それまで不明の点の多かつた浦幌式土器多数と石刃鎌石器群（石刃鎌・石刃槍・彫器・搔器・石斧・石錐・石錐・環飾）などが発見され、この文化内容の研究に大きな成果を上げました。特に、住居と焼土のあり方はシベリア・アムール川中流域にあ

(592)

るノヴォペトロフカ遺跡と共通性があること
も指摘されました。

したがって、この遺跡はシベリア・中国北
部・北海道にまたがる石刃鎌文化の様相解明
に大きな役割を果たす遺跡として重要である。



Fig.2 所在位置図

発行 1994年3月日

発行者 〒089-56

北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地1

浦幌町郷土博物館

印刷所 大同出版紙業株式会社 (080)

北海道帯広市西7条南6丁目